

慢性期の左半側空間無視患者に、『左側に注意しなさい』と指導することは妥当なのか？

○片岡 由夏、阿部 浩明、長嶺 義秀

広南病院 東北療護センター

【はじめに】半側空間無視(以下USN)が回復期以降も残存した場合、諸活動に監視や助言を要することがある。今回、発症6ヶ月以降も左USNが残存した症例に対し、複数の条件下で音読課題、写字課題を実施し、その成績から有効な介入方法を検討した。

【症例】43歳、男性。矯正右利き。バイクでツーリング中、乗用車と衝突。脳挫傷(右側頭葉)、左上下肢複雑骨折の診断で保存的に加療。受傷から6ヶ月後、当院へ入院した。

【神経学的所見】左片麻痺、左同名半盲を認めた。

【神経心理学的所見】左USN、脱抑制、注意障害、見当識障害、感情失禁、交叉性失語を認めた。BIT通常検査90/146、行動検査36/81。

【方法】音読課題、写字課題を以下の3条件で実施し、成績を比較した。1)音読課題：A4用紙に横書きした文章を患者の正中に提示。条件1『文章を読んでください』、条件2『左側を見落とさないように注意して読んでください』、条件3『(紙の左端に赤いラインを引き)赤い線を見てから読んでください』と教示、それぞれ文章の何%を読むことができたか測定した。2)写字課題：音読課題と同様の3条件で実施、何%を写字できたか測定した。

【結果】1)音読課題：条件1では85%(229/296文字)、条件2は87%(251/289文字)、条件3は98%(308/315文字)を音読した。2)写字課題：条件1、2は共に25%(5/20文字)、条件3では100%(19/19文字)を写字した。

【結論】左側を無視している患者にとって、「左側に注意しなさい」という指示は適切ではない。左USN患者に左側への注意を促すには、「左側」という曖昧な指示よりも、より具体的な指示が有効である。